

【館外展示】

2025年12月22日~2026年4月下旬

2025年度サテライト展示Ⅲ

「クリスマスのおはなし

—受胎告知から東方三博士の礼拝まで—

[場所]南島原市原城図書館

2026年1月27日(火)~5月24日(日)

2025年度相互貸借特集展示Ⅲ

「異国へのまなざし—鎖国体制下の日本が見た唐人—

[場所]國學院大學博物館

【イベント】

2026年3月7日(土)

せいなんワークショップ

「聖書植物で押し花しおりを作ろう!」

[場所]西南コミュニティセンター2階会議室

※定員20名/事前申込制

※西南学院大学博物館は、2025年4月より一時閉館中です。再開館の時期は未定です。

行事予定は日程、内容等が変更する場合がございます。各イベントの詳細につきましては博物館ホームページをご確認ください。

大学図書館サテライト展示を実施しました

当館は2025年4月より一時閉館となり、以前のように展示をご覧になっていただく機会が減っています。今年度からは新たな試みとして、大学図書館でのサテライト展示をおこないました。

第一弾は2025年8月18日(月)~10月19日(日)、「『読む』キリスト教 —日本語訳聖書の世界—」というタイトルで展示をおこないました。キリスト教は「言葉」の宗教ともいわれます。イエス・キリストが残した「言葉」は「教え」に変わり、やがて日本にも伝わりました。本展では、その過程を「日本語訳聖書」の歴史から紐解きました。大学図書館が所蔵する日本語訳聖書もお借りして展示し、大学図書館でのサテライト展示として相応しい内容であったと思います。

第二弾は2025年10月20日(月)~12月24日(水)、「降誕 Nativity —クリスマス特集展示—」というタイトルで展示をおこないました。キリスト教では、11月30日に最も近い日曜日から待降節(アドベント)に入ります。待降節では、降誕(イエスが生まれた場面)を表象した人形を飾り、降誕祭を待ち望む文化があります。本展では、時禱書や注解書に描かれた降誕の場面や、様々な国の降誕人形を展示しました。待降節の雰囲気や、地域による表象の違いを楽しんでいただけるような内容であったと思います。

大きな規模での展示会は難しくなりましたが、当館では引き続き、学内の皆様に資料をご覧いただける機会を作っていく予定です。

学芸研究員 鬼束 芽依



編 集 後 記

クリスマスは一年の中で大学がもっとも華やかで彩り豊かな時期です。この時期恒例となったワークショップ「クリスマスカードを作ろう!」でも、色とりどりの美しいカリグラフィーのカードが出来上がりました。新年の挨拶をメールなどで済ませることが多くなった今、紙に便りをしたため、大切な人に届けるクリスマスカードの良さをあらためて実感しています。

学芸員 宮川 由衣



所蔵品紹介「ゲゼル農耕曆石板」(複製)

Gezer Calendar

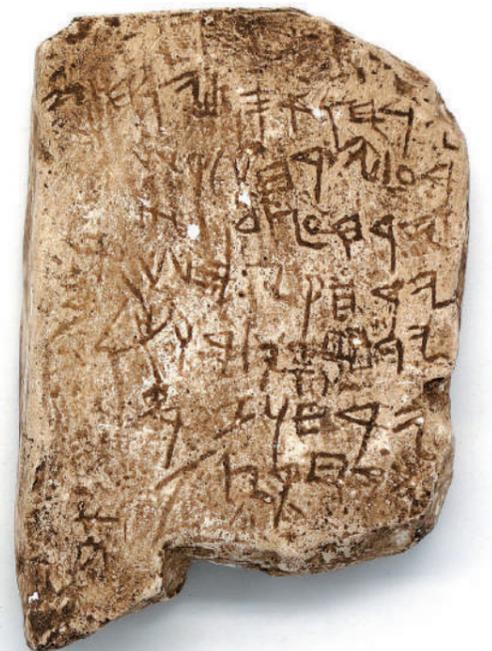
原資料:紀元前10世紀/イスラエル・パレスチナ/縦10.8cm×横7.0cm×厚さ1.6cm/イスタンブール国立博物館蔵

ゲゼルは、エルサレムの北西約30kmに位置し、旧約聖書に登場します。「ゲゼル農耕曆石板」は、1908年にアイルランドの考古学者のマクアリスターがゲゼル遺跡で行った発掘調査で出土した、石灰岩製の石板です(Macalister 1912)。ゲゼル遺跡の時期区分の第V期(第4セム期)の遺物集積中から、土器などの少量の遺物を伴って発見されました。土器の年代などから紀元前10世紀に遡り、現存する最古のヘブライ語碑文と考えられています。

石板には古代イスラエル・パレスチナの農耕における季節に関する情報が記されています。

- (オリーブの)収穫の2か月(9-10月, 10-11月)
- 穀物の種まきの2か月(11-1月, 12-1月)
- 遅い種まき(春の成長期)の2か月(1-2, 2-3月)
- 亜麻の収穫の月(3-4月)
- 大麦の収穫(4-5月)
- 刈入れとお祭りの月(5-6月)(または「その他の収穫の月」)
- 葡萄の摘取りの月(6-7月, 7-8月)
- 夏の果物(主としていちじく)の月(8-9月)

(関谷定夫 1986年, p.153より引用)(カッコ内は現行曆)



ゲゼル遺跡内のほかの遺構からは、小麦・大麦・豆类・イチジク・ブドウなどが炭化した状態で見つかり、石板の内容と一致しています。この石板の記述は、出土した植物が遺跡周辺で栽培されていたことを裏付けています。またこの石板の曆は、秋から始まる農耕曆です。紀元前13世紀ごろのモーセ時代のことが描かれた『出エジプト記』(12:2)には、「この月はあなたがたの第一の月であり、一年の最初の月である」と記されています。「この月」とは「ニサン月」で、春にあたります。つまりモーセ時代から始まるとされる宗教曆においては、一年は春から始まるのです。この石板の曆はモーセ時代から続く宗教曆とは異なり、現代用いられているユダヤ曆と一致しています。

本博物館は聖書考古学関連資料も数多く収集しています。そのほとんどは、本学神学部の関谷定夫名誉教授が収集したコレクションです。古代のランプや近現代のユダヤ教祭具などの資料もあります。聖書考古学とは、聖書に登場する遺跡を中心に、関係する歴史的出来事や文化的背景を、考古学の観点から研究する学問です。この石板もその成果物の一つです。

<主要参考文献>

関谷定夫「増補改訂版図説旧約聖書の考古学」ヨルダン社、1986年

Macalister, R. A. Stewart 1912 *Excavation of Gezer*, vols.1.2, John Murray (London)

学芸調査員 松尾 優里

聖書植物だより

聖書植物園で3～4月頃に見ごろとなる植物をご紹介します

クロガラシの種は、「からし種一粒ほどの信仰があれば、山をも移すことができる」という、信仰の大切さを説いたイエスのたとえ話に登場します。「からし種」は小さいものの象徴であり、「山を移す」ことは困難な問題を解決することを意味すると言います。

クロガラシが明るい黄色の花を咲かせる頃、オオアマナは可憐な白い花を咲かせます。聖書では、北イスラエルの首都サマリアが大飢饉とアラムの王の軍勢による包囲に見舞われ食糧危機に陥ったとき、普段は売り物にもならない「鳩の糞」が高値で売られたと記述されています。この「鳩の糞」という名前は、この花が岩石の間に咲いているところを遠くから見ると、鳩が糞をしたように見えることが由来であると言われています。可憐な見た目と呼び名のギャップが面白い植物です。

クロガラシは一号館南側、オオアマナは二号館南側にて育成されています。聖書植物園巡りの際はぜひご注目ください。

学芸調査員 栗田 りな



クロガラシ/からし 花期:3~4月 聖書箇所:マタイ福音書17章19-20節



オオアマナ/鳩の糞 花期:4月 聖書箇所:列王記下6章24-25節

ワークショップだより

2025年12月6日(土) 「クリスマスカードを作ろう!」を開催しました

2025年12月6日(土)に、せいなんワークショップ「クリスマスカードを作ろう!」を開催しました。クリスマスのお話を読み聞かせした後、カリグラフィーペンを用いて、クリスマスカードを作成しました。最初はカリグラフィーペンの扱いに苦戦しているようでしたが、次第に慣れていく様子が見受けられました。中には、様々な種類のペンやシールを持参し、豪華に飾り付けている方もおり、それぞれ趣向を凝らしたクリスマスカードができていました。参加者の方々からは、「初めてカリグラフィーをしました。とても楽しかったです」、「準備を十分にさせていただき、作業に集中できるようにさせていただいて感謝します」などの感想をいただきました。また、何度も参加してくださっている方からは、「毎回楽しい内容でうれしいです」といった感想をいただき、大変嬉しく思います。次回のせいなんワークショップもお楽しみに。皆様のご参加をお待ちしております。

学芸調査員 村田 早紀



2025年12月4日(木)・8日(月) 留学生別科ワークショップを開催しました

西南学院大学には留学生別科があり、世界各国の協定校から毎年150名ほどの留学生が学びに来ています。留学生別科では、日本語のほかに日本文化や経済などの日本研究に関する科目が提供されています。

今回は、「漫画アニメに見る日本のコミュニケーション」、「漫画アニメに見る日本社会」の科目を受講している留学生のみなさんを対象として、「和綴りでメモ帳を作ろう!」を開催しました。まずは、西南学院大学図書館所蔵の『筑前名所図会』(複製、1973年刊)を参考に、日本の伝統的な製本方法である和綴じについて学びました。その後、千代紙のなかから好きな柄のものを選び、メモ帳の表紙を作った後、四つ目綴じでオリジナルのメモ帳を制作しました。

今回のワークショップには、アシスタントとして本学の日本人学生も参加しました。慣れない作業に苦戦する様子も見られましたが、学生同士で助け合いながら作品を完成させていました。この体験が、日本での留学生活の楽しい思い出となっていれば嬉しく思います。

学芸調査員 大番 島



大学博物館のお仕事

X

「IPM」

博物館が所蔵する資料の劣化には、様々な種類があります。その一つに虫やカビなどの生物による劣化があります。「IPM(Integrated Pest Management)」は、日本語で「総合的有害生物管理」や「総合防虫管理」といわれ、「予防」「監視」「対処」「記録と評価」という流れで、生物による劣化を防ぐ管理戦略のことを意味します。

博物館や美術館で、「飲食を控えてください」「ゴミを持ち帰ってください」などの注意書きを目にしたことはありませんか? これは「予防」にあたり、IPMのもっとも重要な土台部分

です。虫やカビを寄せ付けるもの(食べ物のカスやほこりなど)を排除し、隙間などを防ぐことによって侵入を防止します。それでも、虫やカビが侵入してしまうことがあります。実は西南学院大学博物館は、建物が古いため隙間が多く、「予防」が行き届かないことが多いです。そこで、「監視」が重要になってきます。館内に数十か所粘着トラップを設置し、どのような虫がいるのか・どこから発生しているのか・時期ごとに変化はあるかなどを調査しています。調査結果に基づき、発生の原因を突き止め、それに対して「対処」をおこないます。当館では主に発生場所の清掃や消毒、文化財用の殺虫・防虫剤の散布などをおこなっています。さらに、害虫発生箇所は都度スタッフ全員で「記録」し、共有して予防や対処の「評価」をおこなっています。

現在は一時閉館中ですが、博物館の建物(福岡県指定有形文化財)や博物館資料を守るために、日々IPMに取り組んでいます。

学芸研究員 鬼束 芽依



▲粘着トラップ回収の様子